

第23回 夏期福音特別集会（4）

愛泉無尽

――ロマ書第8章31～39節――

1976年8月22日（鹿沢）

小池辰雄

キリストは我らの味方だから 無相の相 キリストの見えざる手がやって来る キリストの本願の愛 キリスト即如の世界に入る キリストの愛から離れられない 神の人は酒なくして酔う 絶美の美 宇宙の創造者の霊と融合 魂がキリストの霊気を呼吸する

【ロマ8・31～39】

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。 32 己の御子を惜しまずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。 33 誰か神の選り給える者を訴えん、神は之を義とし給う。 34 誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。 35 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。 36 録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。 37 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。 38 われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、 39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

●キリストは我らの味方だから

新約聖書の中には日本アルプスの峰のごとく、いくつも聳えている峰があります。その高峰の一つがロマ書8章です。そのまた先端が31節から39節です。このパウロの叫びは天を揺るがしたと思う。

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

ここにギリシヤ語では「もし」という言葉がありますが、パウロが「もし」と言ったのは、なにも仮定で言ったのではない。これは「神もし我らの味方ならば」ではなく、

「神が我らの味方であるが故に」



です。「ならば」ではなく「なれば」です。

「神が我らの味方なれば、誰か我らに敵せんや」

です。

「儀文は殺し、霊は活かす」

というが、パウロの言葉すらも、その文字面にとらわれてはいかん。

「神さまは私たちの味方であります。だから、もう敵はありません」

と。仮定の形において、実はもう少し奥の事実をパウロは語っていると思う。言葉の奥を讀んでいかないとダメです。

「神は我らの味方」

というのはパウロにとつては同じく

「キリストは我らの味方」

ということです。いつも二重写しになっている。

³²己の御子を惜しまずして我ら衆のために^{わた}付し給いし者は、^{すべて}なか之にそえて万物を我らに賜^{たま}わざらんや。

「全部、キリストをお前にやるよ」

という。神さまは私たちにキリストをくださっている。最大の賜物^{たまもの}はキリストなんです。それを聖名と言おうが、聖霊と言おうがいい。実体はキリストです。キリストを賜^{たまわ}る。

全宇宙は私たちのもの。ものと言つても、私有するものではない。私^{わたくし}するものではない。全宇宙は友だちです。一草一木が全部、身心である。自分の身であり心である。全宇宙が即ちわが身体わが心である。「万物」とは物質ではない、活けるものです。神さまの造ったものはみなそのような霊が通っている。石ですらそうです。

「石が叫ぶ」

とキリストが言われた。「石心」という。これは良い意味と悪い意味とがあるけれども、石の如くに動かないところの不動の意味がある。すべてのものが私たちの身体です。自然を愛すると言いましても、本当に一つであつて、愛するという言葉すらもある意味においては、要らないくらい^{なぞしこ}の境地になるわけです。「あれは私ではないか。あそこに私の姿を見てください」というわけです。

●無相の相

正岡子規(1867～1902)の歌に、

「庭もせの草刈りかねつ撫子の花やまじると思ふばかりに」

という歌がある。雑草が庭にはびこっているが、その中に撫子^{なでしこ}が交じっているといかんから、草を刈りかねてしまう。そのように撫子の花を愛惜した。

「毒麦と本当の麦とを放っておけ、やがて時がきたらハッキリと判然するから」



とキリストが言われた。あれと同じようなわけです。

撫子を見れば私は撫子となってしまう。大木を見れば私は大木になってしまう。無相の相^{すがた}です。無相法身^{むそうほっしん}という。パウロは正にこの無相法身なんです。パウロの実に驚くべき魂と心と智慧と豊かな姿は、みなキリストがそのようにして彼の中でいくらかでも自由自在に動いている。これが無相の相である。限定して言えない。限定することのできるものは大したものではない。

そういうわけで、

「万物を賜わらざらんや」

なんて言っちゃって、

「万物は私たちではないか」

というわけです。キリストをくださった神さまです。

「万物は私たちのものだ。また、万物は私たちではないか」

と、もう一つ突っ込んで言えるわけです。

「石をあげてみる、そこに私がいる」

と外典の中でキリストが言っている。モーセが荒野にいて叩いた岩、そこから水が流れてきた。

「あの岩はキリストである」

とパウロはハッキリ言っている。大胆な表現です。

「自然感」と言っても、観^{かん}ではない。自然を観ているのではなく、自然を感じている。体感している。身体で感じている。だから、

「万物即私たちだ、私たちの姿だ」

という。こんなうれしいことはない。讃美歌512番の1節に、

「わがたましいの したいまつる

イエス君のうるわしきよ、

あしたの星か、谷のゆりか、

なにになぞらえてうたわん。

なやめるときの わがなぐさめ、

さびしき日のわがとも、

きみは谷のゆり、あしたのほし、

うつし世にたぐいもなし。」

とある。これはキリストのことを「とてもなぞらえきれない」と言って歌っている。

●キリストの見えざる手がやって来る

³³ 誰か神の選^{えら}び給^{たま}える者を訴^{こた}えん、神は之を義とし給^{たま}う。



聖書は始めから終りまで義が貫いている。愛を言うときには、その奥にちゃんと義がある。義を言うときには、その奥に愛がある。この二つは楕円形の二中心と言ってもいいようなわけです。地球が太陽のまわりを回っているのは楕円形だ。別な太陽的な中心があるような回り方をしている。それが義と愛です。義が即ち恵である。義という言葉が楽しくならなければダメです、何か硬いものと考えているうちは。私たちの姿は義ではないですか。天を指していて垂直ではないですか。天を指している姿が即ち義なんです。我々の祈りは、ぶっ倒れる祈りももちろんあります。しかしまた、天を仰いである祈りもある。アンテナです。

道元が、

「せきしゅ おんじょう
隻手の音声」

と言った。片一方の手の音を聴くという。両手で打ち鳴らした音は聞こえるけれども、片手の音は聞こえない。けれども、如来の手がある。一極絶対の手は本当の聞こえざるころの霊音を、妙音を発している。神韻しんいんひょうびよう縹渺たるものです。私は皆さんに按手あんしゅをする時に肩に手をおく。

「キリストさま、どうぞ頭に手を按いてやってください」

という気持ちで私はやる。キリストの見えざる手が、永遠の腕がやってこないことにはどうにもならん。皆さんはこの集会で聖霊のバプテスマをまた受けられる。必ずこういう集会ではそういうことが起きます。

「キリストはわが義なり」

ということがまず先です。

「信仰によって義とされる」

というのはそういうことです。

「キリストを受けとることによって義よとされる」

ということです。「義」なんて言わなくて、簡単に「よし」でいいよ。キリストに「然り、アーメン」と言うことが、キリストを義としたてまつること。

藤井武先生の奥さんは四人目の子供を産んだあとでまもなく仆れた。内村鑑三先生がその告別式をなさった時に、

「神さまに言い分がある。神を義とせよ」

と言われた。藤井先生は「アーメン」と応えられた。

塚本虎二先生は大震災の時に梁の下敷きになって奥さんを亡くされた。塚本先生ももう少しでやられるところだった。その時に先生は涙の中から、

「神は愛なり」

と来たそうです。「神は義なり」も「神は愛なり」も、これは同じなんです。

我々の姿が神を義としている姿である。



「はいっ、然り、アーメン」

と、それが神を「義とする」ということです。アブラハムが「アーメン」といったら、神さまが「よし」と言ったという(創15・6)。もともと「義」という字は神を「アーメンとする」という字だから。

私たちが義でありえないのを、キリストが十字架で贖ってくださったから、その義そのものをくんだり、贖いの愛そのものが私たちの方にしみ込んでくるわけです。

●キリストの本願の愛

だから、

³⁴誰か之を罪に定めん、

キリストの義をいただいた者を、どうして罪びとと言えるか。根底的には贖われたる者、相対的存在としては相変わらず罪びと。クリスチャンは死にいたるまで罪びとである。しかしながら、クリスチャンは死にいたるまで義人である。

「義人にして罪びとである」

ということはルッターがハッキリ言ったことですが、パウロが言っていることと同じです。けれども、この義人が罪びとに勝っているわけです。

木喰上人の歌に、

「仏法はよきもあしきもへだてなしわが本願にもらすものなし」

とある。最後の境地は相通ずる。彼は仏像の木彫をしながら、日本中を行脚した。^{あんぎや}

「良き者にも悪しき者にも神さまは太陽を昇らせ雨を降らせ……」

とキリストが言われた。あれと同じです。相対的な善悪なんてものは問題でない。キリストの本願、これから漏れるどんな悪もない。十字架上の片一方の盗賊も、「悪かった」と言っ
て謝れば直ちに天界へ往く。逆らっていたらダメですよ、それはサタンの子だから。パウロは始めはそっちの方だった。これがひっくり返された。

この本願を受けとれば、この本願の大慈大悲の中に入れたら、それから漏れる者はない。「誰か罪せんや」というのはそのことです。キリストが義とし、キリストの本願の愛がかかってきたら、誰がこれを審くことができるかという。

「審くものは自分の審判によって審かれる」

とキリストが言われた。

「木喰のけさや衣は破れてもまだ本願は破れざりけり」

行脚で「木喰の袈裟や衣は破れても」ということは自分の心がどんなに破れても、「まだ本願は破れざりけり」ということ。本願はこの破れを包んでしまう。愛は一切を包む。愛は人を包み、一切を包摂、^{ほうせつ}抱擁してしまふ、^{ほうよう}抱いてしまふ。

死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、^{いま}我らの為に執成し^{とりな}



給うなり。

天界の大祭司です。祭司と預言者は相対立したものではありません。預言者は、どちらかという、義の角度です。義が前面にでる。祭司は愛の方。執成す。神の言を伝えるのが預言者。人の苦しみ悩みを執成すのが祭司。だから、キリストは羔羊こひつじとなり同時に大祭司となつた、ということがこの十字架であります。しかし、本当の預言者はもちろん祭司の面を、深い憐れみの消息をもっている。第二イザヤ書は正にそうです。いわゆる宗教儀式的なものを取り扱う者を、つい祭司と思うものだから、祭司という言葉が躓きになるけれども、そういうことではない。お寺のない坊さんが本当の祭司です。我々は即ち活ける神殿である。活ける神殿だから、私たちは本当の祭司である。執成しをする。

●キリスト即如の世界に入る

キリストは天界で私たちのために執成していただくっている。

³⁵我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、

ヤコブ書の4章5節に、

「聖書に『神は我らの衷うちに住ませ給いし霊を、妬むねたほどに慕いたもう』と……」
(ヤコブ4:5)

とある。キリストの愛は、私たちの中の霊を「妬むほどに」――サタンに取られないように――慕うという。そこで今度は、私たちの中に聖霊を新たに降だしたもう。キリストの愛はただ天界で愛しているのではない。キリストの愛は具体的に私たちのの中に聖霊として臨んでいる。これはロマ書5章5節にあるとおりです。

「希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注

げばなり」(ロマ5:5)

「キリストの愛」と言おうが、「神の愛」と言おうが、同じことです。御霊の愛、愛の御霊。キリストの愛が天界にあると同時に、私たちに具体的に聖霊の愛として、愛の御霊として入ってください。何でも、本ものというものは即の世界です。即如一如の世界である。(私にはもう異言がきている)。

「わがうちなるキリストを見よ」

と。それを見損なえば躓きます、私は破れだから。

破れない人は、整っている人は可哀相ですよ、キリストが入ってこないから。キリストは破れの中に入ってくる。閉じこもったサザエなんかには入ってこない。キリストは殻を破って入ってくる。

「なぜ、お前はそんなに整っているか。人間の自製の整いなんてものは生命がない。八方破れだぞ」

と。八方破れの構えというのはすきがない。何か構えているような構えは本当の構えでは



ない。

³⁵我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。

これはみなパウロが体験している事態です。パウロは全部これにぶつかっている。だから、こう言っている。頭で考えて言っているわけではない。

³⁶録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。

殉教道を歩いている。殉教でなくて、殉道です。我々はみな十字架を負っています。キリストの十字架を仰いでいるばかりではない。キリストの十字架の一端を負っている。

「汝、わが弟子たらんと思うならば、己が十字架を負いて我に従え」

と、キリストは烈しいことを仰る。私たちには「己が十字架を負いて我に従う」ことができない。

「私を受けてごらん。できるから」

ということ。キリストは、

「私を受けないでできることは、ひとつも私は言っていないよ」

という。手放しでやろうと思ったら、キリストの福音なんてのは福音どころのさわぎでない。どの言葉も落第だから、やりきれない。けれども、キリストを受けると、このキリストの我々に不可能な言葉が、可能どころではない、力を与える言葉になる。

あなた方という懐中電灯は絶えず上から充電するものがある。日曜はもちろんそれでしょうけれども。「あまつ真清水流れきて」という。今日の題に「愛泉無尽」と書きました。愛の泉は尽きず溢れて流れこんでくる。無尽の霊ですから。いろいろな事にぶつかったら、すぐその場でもって

「主さまよ！」

と内側で叫んでキリスト、即如の世界に入る。

「南無キリスト！」

でも何でもいい。それを具体的にやっていかなければダメです。大事なのは日常生活のその鍛えです。そうすると、今度は次の日曜日には、みなエラク輝いた顔をしてくる。くたびれた顔をしてたらダメなんだ。「栄光より栄光へ」という。輝きより輝きへとなる。いよいよ、信仰より信仰へ、力より力へとなる。そういうキリスト者でなければ本ものでない。毎日の生活でもって、そういう無者修行しているか、どういふ場合にもキリストを否まないでやっているか、ということ。どんなことがありましても、決して我々はキリストの愛から離れない。殉道の道をいきます。

³⁷然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。



我々がキリストの愛を表す表し方、また、いろいろな事にぶつかってその表れ方はいろいろです。言葉は愛という一つの言葉だけれども、内容は千変万化です。

●キリストの愛から離れられない

親鸞が一夜の宿を借りようと思って、ある家の戸を叩いた。婆さんが雨戸をあけて見たら、乞食坊主が立っていたので、

「お前みたいなきたない乞食坊主を入れられるか」

というわけで、戸をピシャツと閉めた。

「そうでございますか、それでは軒下に寝かせていただきます」

と。お釈迦さんの如来の愛がこの婆さんに勝ってしまった。そこで、彼は軒場で寝てしまった。さすがの婆さんもちよつと気がとがめたものだから、明け方近くなって、そーっとまた開けてみた。そしたら、その乞食坊主の身辺に何ともいえない光がさしていたので、婆さんは

「参りました！ 私が悪かった」

と言って、今度は道をお共して行つた。別れの時に、

「手拭いに何か書いていたきたい」

と頼んだら、親鸞は、

「南無阿弥陀仏」

と書いてやったという話です。これは、情なき人の仕業つれに対して、これを軟らかく受けとって、勝ってしまった。「勝ち得て余あり」というのはそういう世界で、相手を救い上げてしまうことです。蓮月の有名な歌に、

「やどかきぬ人のつらさを情なさけにておぼろ月夜の花の下ふし」

とある。蓮月も宿を借りようと思った。ところが、貸してくれない。「つらさ」というのは「つれなき、無情」ということです。無情を情として受けとる。断られたので、自分は少し離れたところの木の下で寝たら、月がでてきた。それは朧月おぼろつきで、その木は桜の花の木であった。

「桜の花を屋根にして、朧月夜で風流な気持で私はここで寝る。あなたの情なきつれのためにお陰でこういう所で私は寝られます」

と言って、その情なき人の方に向かって合掌して感謝したという。

神の愛の世界は、どんなに責められても、キリストが言われた、

「汝らを責める者の為に、迫害する者の為に祈れ」

という世界です。相手が可哀相でしょうがない。こつちがもう次元が違うから。どんな仕打ちを受けても、本当の力あるところの、生命あるところの愛は相手を救い上げてしまう、祈りあげてしまう。

38 われ確かたく信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん



者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

天上天下、地獄、いずこであつても、このキリストの愛から離れられない。どんなものもこのキリストの愛から離れさせることができない。ということは、このキリストの愛でそれらを全部貫いてしまうわけです。「離れしめられる」どころではない、これで貫いてしまう。本当に勝つてしまう。愛の勝利は一切を包んでしまう。

「愛は凡^{おほ}そこと包み貫^ぬき、凡そこと信じ貫き、凡そこと望み貫き、凡そこと耐え貫く」

「貫^ぬく」という字を私は付けた、ギリシヤ語には付いてないけれども。貫かなければダメです、途中では。これを分析して考えたらダメです。包むも、信ずるも、望むも、耐えるも、ある一点から何でも出てくる。それが聖霊です。私は「聖霊」と言うときに、意味で言っているのではない。

皆さん、祈るときに、福音書のキリストの――どこでもいい――具体的なキリストを瞑想して祈ってください。そして、そのキリストに本当にぶつかって行きなさい。そのキリストの前にぶつ倒れるか、しがみつるか、何でもいい。キリストは、

「よしっ」

と捕まえてくださる。そこに聖霊が来る。ひとつも観念でない。祈りも決して観念ではない。だから、私は「聖書はドラマである」と言う。二千年前のドラマは今、私たちに臨んでいるドラマであるから、聖書をそのようにして受けとっていかないで読めるか。ボールがかかってしまう。

●神の人は酒なくして酔う

エレミヤは、

「私は神の言に酔ってしまった」

と言った。神の言に、キリストの言行に酔わなくては。キリストに捕まえられると、酒に酔うどころの騒ぎではない。

インドにジャガールディンという人がある。こういうことを言っている。

「神の人は酒なくして酔い、神の人は肉なくして飽く。神の人は法衣なくして衣を着ている。神の人は貧窮にして豊かである。神の人は限りなき海である。神の人は雲なくして玉雨を降らす。神の人は無宗教と宗教を超え、神の人に善と悪とは同じである。」

水だけを飲んでいてもお腹一杯になる。いわゆる法衣は要らん。いわゆる宗教なんて言つて、もったいぶっている世界ではない。善悪の悲願の世界ということ。

こういう言葉は若い人に言うのと躓きになる。「そうか、善悪どちらでもいいのか」なんて、



道徳が乱れてしまう。道徳の戦いを大いにやりなさい。マルティン・ルッターはそれをやった。そして、突き抜けていかなければ。やはり、体験していく段階というものはありますから。段階なしで、いきなり私の話を聞いて、その中に入ったような顔していると、とんでもない、どこかでもって足を掬すくわれてしまう。けれども、大事な境地を聞いておくことはもちろん結構なことです、「よし、それをいつか把つかんでやろう」と。すぐ把つかんだっていいよ。

一切をキリストの愛で浸透あまねしてしまおう。「離れしむる」どころでない。キリストの愛を全部、遍照あまねしてしまおう、遍照あまねしてしまおう。

太陽の光は外に光っています。けれども、室内の中にも光がちゃんと来ている。これを和光という。やわらかな光です。外はもの凄い強烈な光です。「和光同塵」という言葉がある。まぶしくないように光を和らげ、塵と同じくなる。相手の中に入って、

「我はユダヤ人に在りてはユダヤ人となり、律法の下にある者には律法の下にある者となる。これはいかにもしてこの人たちを救わんと思うからである」

とパウロは言った。これはあの偉大なパウロの気持です。「お前、それは福音的ではないではないか」なんて言わない。その境地に入って、そしてその中からだんだん救いあげていく。それが和光同塵の姿です。弱き人には弱き人となり、強いやつはひっくり返してしまう。いろいろなやり方がある。それは愛の千変万化の在り方です。「愛はかくかくのものである」なんて言ったらとんでもない。

「神の怒りすら異なる愛である」

とルッターは言いました。そのとおり。

「私たちの魂は、男女の結婚のごとく、神の言ことばと一体となる」

とルッターがハッキリ言っている。言と霊は、ルッターにおいては一つなんです。それを見損なつて――ルッターは聖書を翻訳しただけあつて、言の面を強く言つたものだから――そのエピソード（模倣者、亜流）が「み言、み言」と言つてやっているわけだ。ところが、ルッターはその奥に聖言を霊然こんぜんとしてつかんでいる。それでなくて、あのルッターの翻訳ができますか。後からどんなに学問的に優れた、文法的には厳密な訳があつたって、訳そのものではルッターにかなわないのは、彼は聖霊をもつて訳しているからです。

●絶美の美

そういうわけで、私たちはもう「キリストの愛」なんて言わなくなつていい。ただキリスト一切です。智慧も力も生命も義も愛も、渾然こんぜん一体であるところのキリストです。帰するところはこのキリストです。だから、私は

「南無キリスト」

と言う。これが聖名みなということ。キリストという聖名をいただいて、うちに持っている。その聖名は生きている聖名だから、聖霊である。



「大自然は美わしい」といいますね。けれども、この美を醜に対する美と思つたらダメです。どんな事態も真の姿は美わしい。美醜を超えたところの美、これを私は絶美と言います。普通は絶美という一番美わしいものというような気持ちかも知れないが、そうではなく、美に絶しているものを絶美の美という矛盾概念で言いたい。「美わしき魂」というのはそういうわけです。

神さまは最大の芸術家である。神さまの造つた芸術品は生きている。最大の芸術品はキリスト、お釈迦さんである。キリストが最大の芸術品、最高の美、絶美の美です。「見るべき姿なく……」とイザヤ書53章に書いてあるが、そこに絶美の姿がある。

大自然はそのようなことで、人間が判断するような美ではない。人間が色彩をすると何か少し不調和があるけれども、あの自然の花と葉の形と色の在り方との配合はどれも本当のハーモニーをもっている。何という造化の妙であるか。自然には恥部はない。神さまの造つたものは相對のところではない。私たち一人ひとり本来そういう姿である。その姿に立ち返ろうということ。キリストが立ち帰る道をちゃんと造つてくださった。そして、

「遂に栄光より栄光へと各々キリストと同じ姿に化する」

という。「同じ姿に化する」というけれども、S君はどこまでもS君で、NさんはどこまでもNさんです。しかしながら、そこにキリストが現れている、ということですよ。どの顔もみな違う。けれども、これがみなキリストにおいて一つ、ということ。だから、大ハーモニー、大調和の世界である。皆それぞれの特殊性をもっている。大交響楽は一つの弦が切れてもうまくない。

●宇宙の創造者の霊と融合

著作集第二巻『芸術の魂』から引用します。

「大自然の絶美の美、天然のこころと融合しようではないか。仏教の言葉でいうと、そこに「自然法爾」じねんほうにがある。真如の月の相である。」

「自然法爾」おのというの、たくまずして自ずから法の世界にある姿をいいます。真如の月の相がこの境地を代表しているという意味です。これは静かな相、静の相です。今度は動の相です。

「更に次元を超えた宇宙の創造者の霊と十字架を通して融合しよう。烈々たる活現の太陽の如く、聖霊が胸に燃えて仕方がない。」

それが動の相です。東洋は、仏教の世界はどちらかというと、静の世界です。キリスト教は動の世界です。静動一如の、動中の静、静中の動ということ。女の方でいうと、マルタとマリヤがその中で一つになっている。時にマリヤとなり、時にマルタとなる。あのマルタがマリヤのことを気にしたからいかん、一極絶対でないから。一生懸命でキリストのために働いていればいい。マリヤは一生懸命になつて聞いていた。マルタは一生懸命で働



いていたら、それが本当のマルタだったんだが、ちょっと分裂したから、キリストにやられた。マルタが悪いのではない。ある時はマリヤとなり、ある時はマルタとなる。マリヤとマルタがその人において一つになっていなければダメです。本当の男子は女性的なるものがちゃんと入っている。本当の女性はそこに男性的なものもある。永遠に男性的なるもの、永遠に女性的なるものは、一つになってこれが永遠に人間的なるものとなる。それはキリストがそうなんだ。キリストが言われた、

「幸いなるかな、霊の貧しきもの、天国はその人のものなり」

というのは女性道です。ところが、あの女性道をキリストは身に体していると、そこにも素晴らしい英雄道がでている。本当に受けとつているところにはもの凄い力が来ているんですから。受けとるためには完全に受動です。能動・受動、これまた一如の世界です。

東洋は月の世界、西洋は――キリスト教は――太陽の世界です。福音は実はどちらも持っている。もちろん、仏教も本当の世界にはもの凄い動がありますよ。性格的にいって、そうだと言うだけのはなしです。静動一如。東西南北ありはしない。

これも木喰上人の有名な言葉です、

「本来無東西、何処有南北、迷故三界城、悟故十方空」

(本来東西無し、何処にか南北有らんや。迷うが故に三界は城となり、悟るが故に十方空なり)

という。愉快だね、こういう言葉は。「東西南北」なんか言っているけれども、東西南北なんかどこにもありはしない。地球がそれを表している。東へ東へ行けば、西へ行かなくても、西にぶつかってしまう。この句を管笠^{すげかさ}の中に書いて彼は行脚していた。

禅宗の第五祖のこめつき小僧も同じ精神です。

「本来無一物で、どこを潔めようにも潔めようがない。私は本来何者でもない」

という。やはり、無者の境地だ。

本当の道は無道なんです。これも老子の中にある。無道の道。鳥がそうです。鳥は軌道にそって動いていますか。鳥は風の法則に従って自由自在に三次元の世界を楽に飛んでいる。どんな飛行機も鳥の飛び方にはかなわない。無軌道で後に何も残さない。

霊法は無法の法なんです、その時その時に本当に与えられて進んでいくから。神さまの道は私たちの実存では路になる。各々の足で歩いていく路なんです。でき上がった道を歩くのではない。各々の足で歩くから、天道即地路なんです。本当に天道即地路を歩いている人が本当の実存者です。

●魂がキリストの霊気を呼吸する

藤井先生は『聖書の結婚観』という本の中で再婚否定論を書いている。そうすると、「再婚してはいかん」という律法になったらいかん。内村先生は三度結婚なさった。結婚しよ



うがしまいが、再婚しようがしまいが、人ひとりの路はそれぞれ神さまに示される所を歩けばいい。結婚しないからそれがよいのでも、結婚したからよいのでも、再婚したから悪いのでも何でもない。その人に示されたところを本当に歩くのが結婚道あるいは結婚路なんです。

要は、本当にこの福音の真理が証しせられていくか、ということです。キリストに在っては、私たちは――地上のいろいろな関係がありますが――本当に兄弟姉妹である。人間だから、多少感情的な好き嫌いというものはあるさ。けれども、それをもうひとつ乗り越えた世界を私たちはもつ。このキリストの愛で相手の人を本当に救ってあげましょう、本当に素晴らしいことにしましょうと。魂がキリストに向かってグングン伸びていくのを見ることほどうれしいことはない。一番うれしいことはそれです。

「愛は凡そこと包み、凡そこと信じ、凡そこと望み、凡そこと耐える」

この内容は全部「キリストに在って」です。キリストの愛だから、もちろんキリストに在ってでなければダメです、パウロはそうようにあそこでは言っていないけれども。もう一つ私は加えたいのは、

「凡そこと祈りぬく」

ということですよ。世界の終末の事態、新天新地の事態にむかって、大希望をもって祈りぬいていく。また、小さな事柄に対して、それが本当に神のこととして、救われんことを祈りぬく。誰にも気付かれないで咲いている^{すみれ}堇の花、そういうものを顧みるような。とにかく、その内容がまた実に多種多様なものです。

祈りぬくということは、呼吸が霊の呼吸になる。私たちの肉体は空気を呼吸しています。魂は、魂が呼吸している人、これが祈りぬく人です。魂がキリストの霊気を呼吸している。これはどこまでも一如の中に入っていないとできない、即の世界にいないと。だから、パウロが一番言っている、

「我れキリストの中に、キリストわが中に」

ということが、一切の事態の秘訣なんです。その事態はもはや愛とも何とも表現できないような事態です。遂に表現のできない世界を「無」という。虚無ではない。無という言葉が躓きになるから、余り使いたくありませんけれども。黙って――ただ沈黙ということではないけれども――存在そのものが何かを語っている、何かを告白している、何かを与えている。存在そのものが言葉なんです。だから、

「キリストは神の言である」
ことば

「太初に言あり」
はじめ

というのはそういうことです。言というのは神の表現体ということ。道と言おうが、言と言おうが、どうにもならん。

